

■佐藤泰志 小説家。精神の不調かかえ、4回も芥川賞候補なりながら挫折、自殺に至ったが、近年再評価が進んでいる。

さとうやすし

三大事件・・・1949＝ 北海道函館市高砂町で、佐藤省三・幸子の長男に生まれる。

独立回復・・・1951＝ 2歳：

戦前は松竹蒲田撮影所で裏方の仕事をするほど映画好きだった父は、戦後、青函連絡船で闇米を担いで一家を養っていたが、

自衛隊発足・1954＝ 5歳：この年の洞爺丸台風に、一度は乗船するも不吉な予感に下船して命拾いした日、父に連れられ、映画館でディズニー漫画を見せられるなど、影響を受け、

国連加盟・・・1956＝ 7歳：函館市立松風小学校に入学。

インスタントラーメン・1958＝ 9歳：

安保闘争・・・1960＝11歳：

全国総合計画1962＝13歳：函館市立旭中学校に入学。

中学の卒業文集には'30代に小説を書き始める'など、細かな人生設計を書いて、

大学紛争始・1965＝16歳：北海道立函館西高等学校に入学。文芸部に入り、学習雑誌の投稿欄に随筆・詩・短歌を発表し始め、

いざなぎ景気1966＝17歳：文芸部誌(氷木)に*初の小説「退学処分」を発表。「青春の記憶」で第4回有島青少年文芸賞優秀賞を受賞、

美濃部都知事1967＝18歳：高校で起こった防衛大学校入学説明会阻止闘争を題材とした「市街戦の中のジャズメン」で第5回同賞優秀賞となるが、小高校生の書いたものとして内容的に問題があるとされて、{北海道新聞}に掲載されず、
霞ヶ関ヒル・1968＝19歳：卒業し、函館で浪人生活。『函館西高新聞』に詩「ニューレフト」。『書きなおして「市街戦のジャズメン」と改題し、選考委員の一人沢田誠一が主宰する同人誌{北方文芸}に掲載される。

この頃から数年、大江健三郎、アルベール＝カミュ、ポール＝ニザン、吉本隆明を熱中して読む。

大阪万博・・・1970＝21歳：上京し、国学院大学文学部哲学科に入学。高校時代からの友人らが始めた雑誌(黙示)に参加、

ドルショック・・・1971＝22歳：アメリカン＝ニューシネマ全盛のなか、大学の映画研究会で同級生の漆畑喜美子と映画館通いするうち親しくなると、中野で同棲。その一部と_同人誌{立待}を創刊し、「贖の父親」「追悼」「留学生」を発表。

日中国交回復1972＝23歳：国分寺に転居、以後、短期間のうちに市内を転々とする。「防空壕にて」、{北方文芸}に「奢りの夏」、

石油ショック1973＝24歳：新婚旅行代りに太宰治「富嶽百景」で有名な御坂峠へ。「孔雀」「兎」「犬」、{北方文芸}に「遠き避暑地」、

角栄金脈辞任1974＝25歳：年間目標挙げて{読書・映画ノート}の記録始める。卒論「神なきあとの倫理の問題」を提出して卒業後、メンバーを絞って同人誌{贖エスキモー}をガリ版刷りで創刊、「休暇」を発表。{北方文芸}に「朝の微笑」、

クランブル事件1975＝26歳：編集者の書き直しの注文を嫌うため生活は苦しく、{あかつき印刷}に勤めたりするも、執筆と両立せず、

田中角栄逮捕1976＝27歳：八王子の団地に転居、最初の子が流産し落胆。_ {北方文芸}に発表した「深い夜から」が北方文芸賞佳作。

JALハイジャック・1977＝28歳：国立市の一橋大学生協に調理員として勤める。精神の不調に悩み、上目黒診療所で自律神経失調症の診断を受け、通院をはじめ。以後、没するまで精神安定剤を服用。エアロビクス体操とランニングの療法を始める。「新潮」に「移動動物園」を発表し、新潮新人賞候補作。

成田衝突・・・1978＝29歳：長女が誕生。タイプ印刷に改めた{贖エスキモー}1号に、「光の樹」、小説集「愛あらば一枚の皮膚」発表。

革新大敗北・1979＝30歳：相倉会社{大崎}に正式に就職、その体験がのちの「水晶の腕」に活かされる。{贖エスキモー}に「画家ティハニー」発表。{北方文芸}に「もうひとつの朝」「麗風伝説」、{文芸}に「草の響き」、{幽幻}に「ディトリッヒの夜」発表。*睡眠薬による自殺未遂して入院。

貿易摩擦問題1980＝31歳：長男が誕生。退院。{北方文芸}に「七月溺愛」。{贖エスキモー}に発表した「もうひとつの朝」で作家賞。

・・・1981＝32歳：函館に戻り、大工になろうと函館高等職業訓練校建築科に入学。{北方文芸}に「撃つ夏」、{贖エスキモー}に童話「チエホフの夏」、{文芸}に発表した「きみの鳥はうたえる」が第86回芥川賞候補となり、

中曽根内閣・1982＝33歳：{文芸}に「光る道」。退校して再上京、国分寺で作家生活に入る。{河出書房新社}から「草の響き」と合わせて初の単行本「きみの鳥はうたえる」が刊行される。{新潮}に発表した「空の青み」が第88回芥川賞候補。

デイズノット・1983＝34歳：生計を立てるべく、文芸誌の新人賞の下読みと書評の仕事。{現代・性教育研究}に「鳩」。_ {新潮}の「水晶の腕」が第89回芥川賞候補、{文學界}発表の「黄金の服」も第5回野間文芸新人賞候補、第90回芥川賞候補、

・・・1984＝35歳：次女が誕生。翌年にかけて{日刊アルバイトニュース}に父との思い出綴るエッセイ「迷いは禁物」連載。{新潮}に「防空壕のある庭」、{文芸}に「美しい夏」、{オーバー・フェンス}に小詩集「僕は書きはじめるんだ」。

ジャンボ機墜落1985＝36歳：{オーバー・フェンス}に詩「そのみにて光輝く」。{文學界}に「風が洗う」、{文芸}に「鬼が島」「野栗鼠」、_ 唯一の長編「そのみにて光輝く」の掲載を熱望して実現し、「オーバー・フェンス」も第93回芥川賞候補と、作家としては最も充実するが、

バブル始・・・1986＝37歳：*かつて{北方文芸}に発表した「もうひとつの朝」の{文學界}への再発表をめぐり波紋。事実上、文芸ジャーナリズムから排斥され、アルコール中毒もひどくなり、家庭内暴力も甚だしくなる。

竹下登内閣・1987＝38歳：{文芸}に「大きなハードルと小さなハードル」、

リクルート事件・1988＝39歳：{文芸}に「納屋のように広い心」。翌年にかけて、共同通信社から地方紙へ配信のテレビドラマ時評を月1回書く。_加藤健次編集の{防虫ダンス}に連載を始めた「海炭市叙景」の連作(1まだ若い廢墟2青い空の下海」

昭和天皇没・1989＝40歳：妹由美が急死。{群像}に「裸者の夏」。{文芸}に「夜、鳥たちが暗く」。_「闇と渴き(海炭市叙景2)」「新しい訓練(海炭市叙景3)」「春(海炭市叙景4)」と続け、{河出書房新社}から、表題作のほかに「オーバー・フェンス」「撃つ夏」を取録した単行本「黄金の服」刊行、続く書き下ろしの第2部「滴る陽のしずくにも」を加えた単行本「そのみにて光輝く」は、第2回三島由紀夫賞候補となるが、

トイ統一・・・1990＝41歳：{文芸}に「星と蜜」、{文學界}に「虹」を発表。{すばる}に*「青い田舎(海炭市叙景5)」「楽園(海炭市叙景6)」と発表を続けるなか、ロープをもって家を出、自宅近くの植木畑で自殺体となって発見された。

全作品が絶版となっていたが、死後17年経って{佐藤泰志作品集}が発刊されて、再評価が進み、「海炭市叙景」「そのみにて光輝く」の映画化、ドキュメンタリー映画「書くことの重さ」の公開などに至る。